

初夜

*Original Night*

日はとうに落ちてゐるが、白玉楼は賑やかだった。霊にとつては、夜こそ自分達の時間だからだ。しかし、二百由旬とも謳われる広大な敷地の、その隅の隅に位置するこの離れ——いくつもあるうちの一つだ——は、静かすぎるほど静かだ。それも当然だった。ちよつとした一軒家ほどはあろうかという平屋には、白髪を蓄えた老人と、その孫娘しか暮らしていない。二人は、名を魂魄妖忌・妖夢といった。

囲炉裏の炭がばちばちと爆ぜる音が居間を占めてゐる。外の喧噪とは切り離された、静かな世界がここにはあつた。妖忌は山菜汁を椀につきながら、ぼそりと言う。

「六日の後、お前を外に連れて行くことになつた」

妖夢は何も言えなかつた。二つの意味で驚いていたからだ。食事中、孫娘の祖父を咎める他は巖のように黙りこくつてゐる祖父が、それ以外のことを口にした。それがまず一つ。だがそんなことは、もう一つの理由に比べれば屁のようなものだった。

「連れて行くとは、垣根の外に、ですか」

祖父は頷いた。——衝撃的なできごとだった。

外出という言葉は何の変哲もないものだが、妖夢にとつて非常に大きな意味をもつ。何故なら、彼女は物心ついてから、一度もこの離れの外へと出たことがないからだ。厳密には、離れをぐるりと囲む垣根の外にだが、そんなことはこの際問題ではない。

どちらにしろ、彼女の世界は猫の額ほどの広さしかなく、したがって出かけることは彼女にとつて、好奇心を多大に刺激するものだった。

「何を阿呆のような顔をしておる、戯けめ」

祖父の額に峻険な峰のような皺が走るのを見、妖夢は慌てて平伏した。期待から、声に喜色が浮かびそうになるが、それをどうにか押さえながら口上を述べる。

「私の力をお認めいただけしたこと、真にありがたく存じます。これからもより一層、鍛錬に励んで参ります」

垣根の外を知らないのは、別に引きこもっていたというわけではない。出ることを、祖父に禁じられていたのだ。曰く、栄えある白玉楼に対し、お前はあまりにも未熟である。お前のようなものが出歩けば、白玉楼の格が落ちてしまうから、少しなりともものになるまで、垣根より外に出ることすら禁ずると。

だからなおさら、外に出るといふことは——また、それを認められるといふことは——妖夢にとつて重大な意義を持つのだった。それは、実力がある程度認められたといふことに他ならないのだから。

祖父は何も言わなかった。茶碗に盛った飯を一箸、口へと運ぶ。ゆっくりと時間をかけ咀嚼する様は、米だけでなく、内心の苛立ちをも噛み潰すかのようだ。

彼がそういう態度を見せるとき、その感情の矛先はいつも孫娘に向けられている。何か下手なことを言つたらうかと訝る内に、その喉仏が大きく動いた。内心で煮えていたものを、どうにか飲み込んだと言つた風情だ。

「馬鹿者めが。自分の力量も測れんのか。お前の実力も経験も品性も、白玉楼の敷地を歩くには全く足りぬわ」

低く重たい声は、言っている間に吐き捨てるような口調へと変わつていった。怒りと情けなきの同居したような声色だった。

一方で、妖夢は困惑していた。努力が認められたのだという考えはどうやら間違ひだったようだが、であれば何故、外出してよいことになるのか。祖父は理由もなしに前言を翻すような人間ではない。それが白玉楼のことにもなればなおさらだ。

「お祖父様、では何故、私を連れて行かれるのですか」

「お前を呼ばれた方がおられる。名指しで、連れてこいと儂に命じられたのだ」「私を？」

疑問を解消せんとしての質問だったのだが、かえつて分からないことが増えた。

まず一つは、それが誰かということだ。そしてもう一つは、何故その人物は、自分のことを知っているのかということだ。

妖夢には、他者との交友関係と呼べるものがおよそ存在しない。来客用の湯飲みが埃を被っているほどだ。彼女が幼い頃は、乳母などが訪ねてくることもあったような気がするが、顔も名前も忘れてしまった。そういう人々の中に、まだ自分のことを覚えていいる者がいるのだろうか。それにしても、今更何の用があるのだろうか。

「西行寺幽々子様が、お前に興味を持たれたのだ」

「……はっ？」

またしても、彼女は何も言えなくなつた。

その名は当然知つている。西行寺幽々子。いつか仕えるべきお方であり、それこそ魂魄家における最高の榮譽であると、幼い頃から祖父に言い聞かされて育つてきた。だが、妖夢は彼女の顔も姿も、人柄さえも知りもしない。会つたことがないからだ。

白玉楼の母屋に大手を振つて立ち入りできる立場の者であつても——それは相当の身分であるということの意味するのだが——、西行寺幽々子に会うことの出来る者はそう居ないという。まして、垣根の外に出ることすら許されない妖夢では、会うことなど到底無理であり、願うだけおこがましいというものだった。

そんな雲の上のようなお方が、自分のような下々の者を、一体どうして知つているというのか。そしてどうして、自分に興味を持たれたというのか。

「寝耳に水という顔だな。……実のことを言えば、西行寺様はお前のことをご存じだ。幼い頃からな。今まで言っていないが」

その言葉に、妖夢は深々とひれ伏す。硬い床の感触を額に感じた。感情が深すぎて言い表すことができなかつたが、それでも努力するならば、それは恐れ多きだつた。妖夢にとつて、西行寺家とは神にも等しい。そのように祖父に育てられてきた。神が自分のことを気にかけてくださるとなれば、しかも自分はそれを全く知らなかつたとなれば、感じるのは、光榮より先に畏怖が来てもしようがない。

「お祖父様、あの……西行寺様は、私の剣の力を、お求めなのでしょいか」

そうであれば、どれほど素晴らしいことだろう。声の震えを抑えることができない。起きて飯を食い剣の稽古、昼飯を食い剣の稽古、夕飯を食つて剣の稽古、風呂に入り剣の道の座学を教わり眠るといふような生活を、毎日毎日毎日毎日繰り返してきた。「西行寺家にお仕えする」といふ大義のためにだ。だからこそ、呼ばれるとすれば、それは己の剣に西行寺様が何かを見いだされたからに違いあるまい。

だが、事実は期待を裏切る。祖父は首を横に振つた。

「で、では一体、何のために」

落胆を隠せた自信がない。しかし辛いなことに、祖父に咎められることはなかつた。

祖父も祖父で何か思うところがあるらしく、仏頂面を形にしたような顔に、これまた無愛想な表情を浮かべ、何事かを悩んでいるように、一分ほどただ唸っているばかりだった。いい加減しびれを切らした妖夢は、おそるおそる問い直す。

「では、一体……」

「……母屋に来て、夜伽をせよと。そう仰せだ」

「——は」

彼女は、今度は口をほかんと開けた。そして、またしても質問を投げかける。

「お祖父様、『よとぎ』、とは、一体何をすることでしょうか？」

耳慣れぬ言葉だった。「とぎ」と言われて彼女が思いつくのは「研ぎ」、すなわち刀の手入れであるが、先ほど剣のこととは無関係であると言われてしまったばかりだ。それとはまた別の何かなのだろう。

「——下々の者が、主と共に寝て……それで、世話をすることだ」

その言葉に妖夢は、歯切れの悪い、言葉を選んでいような印象を受けた。祖父はいつも、刀で叩き斬るときのように、何もかもずばずばと断じる。それを思うと、奇妙ですらある態度といえた。

「添い寝をすればよいのであれば、何故私を……」

その原因が自分自身にあると、妖夢は知らない。大抵の性知識が、彼女には欠けていた。教えられてこなかったからだ。時が経つにつれて胸が膨らむことや、月に一度股から血が流れることの意味を彼女は知らなかったし、祖父の身体に比べて、自分のそののなんと不便なことだろうという程度にししか思っていなかったのだ。

ぼろりと零れた疑問の言葉に、妖忌はぎよろりと視線を向ける。

「お前は、西行寺様のお言葉に、恐れ多くも疑問を差し挟むと、そういうわけか？」  
彼女は慌てて、再び頭を下げる。そういうつもりではなかったのだが、確かに失言であった。祖父は短く鼻を鳴らした。

「とはいえ確かに、白玉楼にはそういった役目に従事する者も少なくない。わざわざお前を呼び寄せるぐらいなら、そういう連中を使つた方がよほど良いというのも事実。しかし、そのうえでわざわざお前を呼び寄せたのだ。それだけの理由があつてのこと。ならば、その期待にお応えするというのが我らの務めというものよ」

「期待に——」

その言葉に、妖夢の胸が高ぶる。いち見習いに過ぎない彼女にとって、功を立てることの魅力は大きい。ましてそれが主人の要請によつてのものとなれば、その意味は計り知れない。そもそも、どちらにせよ、西行寺のためとあらば死すら厭わないのが

魂魄家のあり方だ。ゆえに、妖夢が次に放つ言葉は、既に決まっていた。

「お祖父様。私に夜伽の作法を教えてください。必ずや、西行寺様のご期待に応えてみせます」

彼女の言葉に、祖父はしばし黙していたが、やがて、うむ、と短く頷いた。

「時間は少ない。楼を抱えの熟練の娼婦とまではいくまいが、とにかく急拵えでも、どうかお目にかけられる程度にせねばならん。……となれば、遊んでおる暇はない。ついてこい」

彼は立ち上がると、囲炉裏の火を落とし、居間を後にする。妖夢もそれに従った。場所を変えた先は、祖父と自分とで使っている寝室だった。七畳ほどの簡素な作りで、行灯と二組の布団、それから鏡台のみが置かれている。寝るのと身支度のためだけの場所だったが、夜伽というのが「下々の者が主と共に寝る」ということなのであれば、確かに修練には最適であろう。

祖父は何も言わず、妖夢を見ることもなく、ただ黙々と寝床の支度をする。それが終わってから、祖父はその上にどつかと座り込んで、彼女を手招きする。

「儂の膝の上に座れ」

妖夢は指示の通り、祖父に背中を預け、両足を崩した姿勢を取った。彼とどのように

触れあうのは初めてのことで、自然、おそるおそるといった形になる。彼の肉付きは妖夢のそれなどよりずつとがっしりとしており、性別の違いや、剣士としてまだまだ未熟である己を否応なしに思い知らされる。彼女は眉をゆがめた。

それにしても、このようにしているのは、祖父に対して恐れ多い気もするが、何か懐かしくもあつた。かつて誰かに、同じようなことをしてあやしてもらつた気がする。祖父ではない。こんなに硬く、大きくはなかつた気がするのだ。もつと柔らかくて、温かくて——だから多分女性だつたのだろうが、酷くほんやりとした印象しかない。何せ、己が一つか、いつでも二つ位の頃の話だ。

「それで、お祖父様、次は何をすればよろしいのでしょうか」

「……いや、お前は何もせんてよい。ただ、いまから感じることを、しかとその身に刻め。言っておくが、復習の時間はない。忘れることは許されん。よいな」

「はい」

念を押され、彼女は身の引き締まるような思いだつた。

それでよいと祖父はつぶやくと、妖夢の腰へ手を回し、抱きかかえるようにする。もう片手で、彼女のなだらかな胸を、服越しにゆつくりとまさぐり始める。

「お、祖父様？」

慣れぬ行為と感触に、妖夢は引きつった声を上げる。自分以外がそこに触れるのは、およそ初めてのことだ。自分で触れるときですら、ほとんどは、風呂場で身を清めるための、きわめて事務的なものでしかない。それに比べ、彼の仕草は、なんといえばよいか——そう、「ねっとり」としている。

彼女はその手つきに覚えがあった。時折寢床で、どうしようもなく身体が熱くなることがある。そういうとき己の身体に触れると——自然とそうしてしまうのだが——不思議と治る。まさにそのときの触り方だった。

「あれ」のことは祖父にも話せていない。やっ禁てはいけ忌ないことのように思えたし、それを我慢できないとなれば、精神が未熟であると喝破されるのは明らかだ。

知らず知らず、彼女は唇を噛んでいた。身体に触れるときは、いつもそうしている。なにせ、横で祖父が寝ているのだ。下手に声を上げれば、ばれてしまうかもしれない。だからいつも唇を噛み、枕や布団に顔を押しつけるのだった。

祖父はその様をいじましく感じたか、うざったそうに言う。

「声を殺してはならん。……お前が自慰するとき、いつもそうするのは知っている」  
心臓を射止められたような気がした。考えてみれば、祖父のような一端の剣士ならば、いかに眠つていようと、横で不穏な気配がすれば気づいて当然だ。

妖夢もそれは理解していた。それでもあの行為をやめることができなかったのは、やめたくないとの心のどこかで考えていたからだ。だから自分を誤魔化して、浅ましい行いに耽つていた。

「も、申し訳、ありま」

祖父はきつと、そういう幼稚な心の動きまで、何もかも見透かしているのだろう。腹の底が冷えるような思いだった。

しかし、続く彼の言葉は、激しい叱咤でも激しい罵倒でもなかった。

「……あまり深く考えるな。あれは、自慰お前は、お前ぐらいの年頃の娘なら、誰でも経験する」  
「は——」

「咎めるつもりはない、と言うておるのだ。呼吸をするな、飯を食うなど言われて、お前はそれを実行できるのか？ それと同じことよ。ただ、次からは厠にでも行け。五月蠅くてかなわん」

「し、失礼いたしました」

全く予想外の裁定だった。何らかの罰を受けるのは覚悟していたし、下手をすれば破門すらも大げさではないと考えていた。とはいえ、罰のないのが一番だ。しかし、同時に、顔から火が出るような思いでもあった。何もかもばれていたということは、

今まで幾度となく恥を晒していたということだ——あれは、見られて「恥」となる類の行いだらう——なんたる失態か。

彼女の胸中を知ってか知らずか、祖父は手を止めることはない。腰に回した手を、次第に下へとずらしていき、スカートの裾をゆつくりと捲りあげる。

「っ」

反射的な羞恥を感じ、彼女は身をよじって、両脚を閉じようとする。祖父はそれを察したか、すかさず腿の間に腕を差し入れて防いだ。骨張った手は、そのまま衣服の内へと滑り込み、腿にぺたぺたと触れる。温かな祖父の手が皮膚を這っているのを、彼女は明確に感じている。はあ、と、知らず知らず熱い息が零れた。その吐息が何を意味するのか、彼女は知らない。

「本音を言えば、幾らか安心しておる。お前は『まともな』環境で育つてはおらんが、それでも普通の娘のように育っているところもあるのだとな」

祖父はほつりと漏らした。怒りや苛立ちのような刺々しい感情を露わにすることはあつたが——それは殆ど、孫娘のしでかしたへまに対して向けられているのだが——彼が「安心」のような柔らかな心境を述懐するのは珍しいことだった。

「それに、実利の面もある。結果論ではあるが、ある程度日常的に触れているおかげ

で、幾らか楽に訓練を進められる」

「そういう、ものでしょうか」

祖父の安堵とは裏腹に、妖夢は焦燥のようなものを覚えていた。身体の内側から、何かにせつつかれていくような感覚だ。彼女はそれを知っている。祖父が「じい」と呼んだ行為に耽りたくなるとき、このような感覚に襲われる——いや、そのときより幾らか強いようにすら思える。陶器を扱うような祖父の手つきを、もどかしく感じる。「日頃全く外に出ず、終日寝こけて過ごす者と、畑仕事に精を出す者。剣の道に足を踏み入れるとして、どちらが有利かなど考えるまでもあるまい。お前がどちらなのか、言わずとも分かるな？」

「は、はい」

「だが、油断しておれば、筋骨隆々とした若者も、もやしのような貧相な者に負ける。『幾らか』楽ができるとは言ったが、簡単な道ではないぞ」

「覚悟のつ、上です」

声の具合がどうにもおかしい。そのつもりがなくても、どこか上ずった、熱っぽいものになってしまう。日頃なら、なんだその声は、気を抜くな、ふざけているのかと叱咤されるころだが、祖父は何も言わない。

「少し、強くするぞ。痛ければ言え」

言うとは、祖父は慣れた手つきで妖夢の上衣をはだけさせていく。石鹸の淡い香りがほのかに漂った。行灯のぼんやりとした光に、その肌は白く映える。

彼女の身体は、剣士のそれでありつつ、しかし少女のそれであることを捨て切れず、二つの境界を漂っているかのようだった。剣のためにあるべきか、それとも女としてあるべきかという岐路に立たされているところなのだ。全体的に華奢でありながらも、その肌はしなやかで力強い線を描いている。細い首筋がすらりと下ると、うつつらと浮かんた鎖骨へとたどり着く。それは僧帽筋と対をなす穏やかな稜線を描き、腕へと繋がってゆく。そのそばには、常に苦々しく思っている部位——剣のためには不要な二つの膨らみがある。そこはなだらかに膨らみながら、その先端をつん、と尖らせている。夜な夜な触れることもあるとはいえ、手垢に汚れるということもなく、美しい桜の——そう、例えるなら白玉桜の桜の花弁の色をしている。そして腰回りになると、やはり剣の道を志す者といったところだろうか、日々の鍛錬によつて僅かなくびれを描く曲線に、割れはしないまでもうつつすらと腹筋が浮き出ており、その中心で、臍が小さくぼつんと存在を主張している。

鎖骨から撫で下ろすように、人差し指でなぞると、妖忌は小さく、ふむ、と唸る。

「ろくに手入れもしておるまいに、よくもまあ、これだけ綺麗な肌を保てるものよな。化粧に香にと必死になつておる連中が泣くぞ。……血は争えぬということか」

「血——母様のことですか」

妖夢は両親の顔を知らない。ほぼ一切を知らない。元々身体の強くなかった母は、妖夢を産んだ際に他界した。父もそれを嘆き、当主を継ぐ前に自刃した。聞かされてゐるのはそれだけだった。祖父は、彼女の両親について語ることを嫌う。今の問いも、無言のままに流されてしまった。失言であつたというような態度と共に。

その気まぐさを埋めるかのように、祖父は行為を進めていく。片手で妖夢の乳房を掬い上げるように揉みながら、その先端の尖りを親指と人差し指で摘まみ、くりくりと弄んでいく。

「あつ、ふ、くうう」

声を殺すなどは言われたが、一度身についた癖はそう直らない。鼻の方へと抜けていくような、小動物の鳴き声にも似た甘い声が零れた。いつもならば布団に押しつけられてかき消されるそれは、中空に浮かび上がって、寝室にこだまする。

恥を晒しているように感じて、妖夢は奥歯を噛みしめる。声を殺すなど言うに、と祖父は再度たしなめる。

「ふん、まあ、声を上げられなかつた環境のせいもあるうな。ならば、殺せぬほどの声を上げさせるまでのことよ」

言い、祖父は妖夢の太腿を擦る手を、その腰の方、彼女の陰部の方へと近づける。下着を膝上あたりまでしゅるりと下ろさせると、密やかな裂け目に、ぴとりと触れる。「っ！」

それだけで、彼女は背筋を震わせた。その感覚に、彼女自身驚かされていた。火にかけた薬缶に触れて、思わず手を引つ込めるときと同じ、自分の意識より手前にある反応だった。言うなれば、「身体が勝手に」というやつだ。それが何だったのかと訝る暇もなく、祖父は彼女の秘花をゆつくりとなぞり始める。

「ひっ、い、いいっ」

やや高い、悲鳴のような声が、噛みしめた彼女の口から零れだした。祖父の指が、ず、ず、と動いた、突然床が抜けて落下するようなぞぞとした感覚が、背骨を通つて頭にまで走る。それは全く未知のものだった。自分で触れるのとはわけが違う。

「こら、引きはがそうとするでないわ。やりにくくてかなわん」  
「も、申し訳ありません」

気づけば、祖父の腕をしっかりと掴んでいた。手ほどきを請う者の態度ではないが、

それでもしなければこの感覚に耐えられそうもなかったのだ。もっとしつかりとした心の準備が必要だった。

「痛かった、というわけではなからうな、さすがに？」

「いえ、——なんというか、自分で触れるのとは、全然違っていて、驚いてしまって」

「ふむ。……まあ、以後気をつけよ。続けるぞ」

「はい、お願いします」

妖夢が応えるよりも早く、祖父は指を動かし始めていた。その動作は、先ほどの、開いたばかりの花弁に触れるような優しいものではない。

「ッ、あつ！ く、ううう」

と同時に、双丘を弄ぶ動きも再開された。今度は按摩でもするかのように胸全体を揉みほぐしていく。そのじんわりとした甘い感覚と対極をなすのが、股間から上ってくる、背筋をぞくぞくと震わすびりびりとしたあの感覚だ。

閉じようとしているにもかかわらず、顎は持ち主の意に反して開き、喉の震える音を拡散してしまう。心の準備をしても変わらない。どっちにしろ、長い時間は耐えられない。だが、耐えねばならないのだ。西行寺家のために。

「もう濡れ始めたか。こそこそとやっておるときもそうだったが、お前は濡れやすい

質なのだな。感度も良いようだ」

「それはっ、ひ！ 良いこと、なのですか？」

「感じず濡れずよりははずつと良い」

それは幸いだと、妖夢は素直に感じた。劍の稽古をしていて、老いた祖父と比べてすら、男女というものの絶対的な違い、女であることの不利を感じさせられる場面は少なくなかった。今回は女であることが役に立っているようだし、己の体質はその中でも悪くないもののようなのだ。努力で埋めようのないところでの不利がないというのは、それだけで随分とやりやすくなるはずだった。

「うあ、ツああ、いッ！」

何も喋ろうとしないのに、祖父が指を動かすたびに、喉は勝手に震え続ける。身体は跳ね、じりじりとした何かがかみ上げてくる。

その「何か」を、妖夢は知っていて、そして知らない。祖父に隠れて身体に触れていたとき、似たような「波」は感じた。ただ、それはなだらかなもので、身体の疼きに対する一応の充足を与えてくれるものにすぎなかった。それに対して、今こちらに向かっているものはどうだろう。なだらかどころか、まるで壁のようにそびえ立っている。そんなものに晒されてしまえば、自分はどうなってしまうことだろう。

僅かな恐怖とともに彼女の胸中に去来したのは——期待だった。

「ッ、あ、くうう」

妖夢は身をよじった。上体を倒し、逆に足をすくめ、三角座りのような姿勢になる。祖父の指が、彼女の体内へと浅く潜り込んだのだ。

あくまで浅くではあったものの、そもそも彼女にとつて、そこに何かが入り込むこと自体、初めてのことだった。自慰に耽るときは、あくまでなぞる程度のことしかしていなかったのだ。身体の内を他人に割り広げられる感覚は、苦痛でもあり、快楽でもある。そのような矛盾した感覚もまた初めて味わうもので、妖夢は身悶える。

「力を抜け。辛いぞ」

「ッ、うあ、は、はいいつ……」

妖夢とて、脱力には努めていた。だが、そもそも身体を強ばらせねば、この大きなうねりに飲み込まれてしまいそうなのだ。どだい無理な話だった。肩で息をしているのを見、祖父は一旦動きを止める。

「まあ、良いわ。それより、お前が今感じている者を絶対に忘れるなよ。それが快楽というものだ。夜伽において主に要求され、ときには主より与えられるものだ。——やりとりされるものも知らず、その道に足を踏み入れるなど、お笑い種でしかない」

その言葉に、曖昧になりかけていた妖夢の自我が、はつきりと輪郭をとった。

自分はなんと愚かなのだろう。祖父が手ずから教えてくれているというのに、未知の感覚に翻弄されてしまっていた。時間が無いというのに、許されざる失態だ。

「お祖父様、私に快楽を刻み込んでください。それが夜伽のいろはの『い』なのなら、西行寺様のために、私は絶対に忘れるわけにはいかないのです」

「言われずともそのつもりよ。よいか、機をしつかりと保てよ。粘膜を触れあわせぬ交わりとはいえ、不慣れなお前では、それなりに負担もかかるからな。先は長いのだ。気を失っているような暇はない」

「はいっ」

妖夢は力強く応え、来たる行為に備える。ほどなくしてそれは始まった。

「ッ！ あ、は、あアッ!？」

やんごとなき裂け目の端、つんと尖った小さな肉の粒を、妖忌は指の腹で押し潰すように転がし始める。今までも、自分で触れたことはある。しかしそこはあまりにも敏感で、そのため、精巧な紙細工を扱うようにしか触れられなかった。でもなければ、大声を出してしまっていただろうからだ。一方で、祖父の手つきには遠慮がなかった。その場所の過敏さなど関係がないとでも言うかのように、あるいは、過敏である方が

かえつて都合が良いとでも言うかのように、力強い指遣いだつた。

妖夢の腰が、かくかくと跳ね上がる。抑えることができなかつた。身体が、意思の制御を振り切つている。「身体が言うことを聞かない」という状況は、劍の稽古で疲労しきつたときにしか体験したことがなかつた。声帯は野放図に震え、高く裏返つた声が寢室を満たした。

「つあ！ はああ！ ひ、ツ、くウ！」

ごつごつとした指は、彼女の密やかな洞へ少しずつ少しずつ深く潜り込んでいき、最後には彼女の純潔の証にそつと触れる。

「あつ」

例えるなら、心臓に直に触れられているような、そういう致命的かつ根源的な恐怖が彼女を襲う。そもそも「そこ」が純潔を意味するということすら彼女は知らない。しかし、それでも、喪失の可能性を前にして、本能的な恐れを抱いたのだ。

彼女は愕然とした。そのような感情は、劍の鍛錬を通じて克服したとばかり思つていた。祖父は妖夢の情動を見抜いたらしく、子をあやすように語りかける。

「安心せい、と言えるかは分らんが、そう堅くなるな。儂は、奪いはせん。綺麗な身体のまま連れてこいと、西行寺様が仰せだからな」

言いながら、妖忌は膜から指を離し、彼女の肉洞の浅いところを、ぢゅぷ、ぢゅぷと出入りし始める。肉豆を転がし、胸を弄び、彼女に快楽を叩き込んでいく。

「ひ、ッあ！ く、うう！」

全身を暴れ巡る感覚に、彼女はただ頭を振り乱し、我を忘れて嬌声を上げる。何も考えられない。頭へと駆け上ってくる性感に、思考が阻害される。白かった肌は紅潮し、薄桃色に染まっていた。

「あ、だめ、来るっ、何か、あつ、あッ」

あの「波」が目前に迫ってきている。自慰のときに感じていた穏やかなそれとは、やはり大違いだ。津波のような巨大なうねりに対し、彼女はさながら小舟のようなものだった。何の抵抗手段もなく、振り落とされないようにしがみつくのでやっただ。

「イキそうなのか。——お前が感じているそれは、絶頂という。快楽の頂点、夜伽の終着点だ。よし、思い切りイけ。その感覚を、しかと身体に刻み込め！」

「はい、ッ、イキます、妖夢はイキますっ、あ、あああッ——！」

祖父は妖夢にとどめをささんと、双丘の先端をひねるように摘まみ、陰核を中指でぴいんと弾き、秘穴を指の腹で抉る。

三点から同時に叩き込まれた快楽に、小娘が耐えられるはずもなかった。離れ中に、

彼女の悦びの聲が響き渡る。背中は海老のように反り返り、後頭部が祖父の胸にどん、とぶつかる。白い手は、布団を引きちぎりそうなほどの勢いで握りしめていた。

陰裂から、ぷしい、と透明で芳醇な汗が噴き出る。それはぱた、と布団を濡らし、染みをつくっていく。

妖夢の視界は、部屋の薄暗さにもかかわらず白く弾けていた。稲妻が間近に落ちたかのように、激しく明滅する。自らの声が、雷鳴のように遠くに聞こえた。世界からあらゆるものが消え去って、自分の肉体だけが残されたかのようにだ。しかもその肉体は、刺激に対して今までの百倍も千倍も明確に反応するようになったかのようにだった。これが、絶頂というものか。焼け付いた思考の中で、ほんやりとそのことだけが頭に思い浮かんだ。祖父は、この感覚を忘れるなど言った。言われるまでもなかった。これほどの衝撃的な体験、忘れたくとも忘れられないだろう。

それは実際には十秒も続いていなかったのだろうが、彼女にとつては、いつまでも続くかのように思われた。白く光っていた世界がようやく景色を取り戻し、見慣れた寢室の風景に還っていく。

気づけば、布団の上に横倒しになっていた。全身が酷くだるく、呼吸すらも大儀に感じられるが、肺に空気が取り込まれるたび、生き返るような心地よさを覚えた。

自らが相当な粗相をしてしまったことを思い出し、彼女は飛び起きる。祖父に頭をぶつけてみたり、布団を汚したりと、大変な無様だ。怒鳴られてもおかしくないが、祖父は既に立ち上がり、部屋を後にしようとしていた。

「お、お祖父様、申し訳ございません、私は」

「構わん。それより、風呂を入れてくるから、沸いたら入れ。上がったら、さつさと寝ろ。明日からは剣の稽古も潰して、夜伽の特訓にあてる。お前がずぶの素人なのはよく分かった。それを形にせねばならん。休む暇はないぞ。覚悟しておけ」

「は、はい」

言うだけ言つて、祖父は風呂場へと向かっていった。

一人残され、妖夢は胸を撫で下ろした。少なくとも、叱咤されることはなかった。祖父の折檻は、例えば竹刀で打ち据えてみたり、冷水をひつかぶせてみたり、相当に激しい。当然、そうされるような真似をしでかした自分が悪いのだが、避けられるに越したことはなかった。

だが、安心してばかりもいられない。気を引き締めねばならない。怒られなかったのは、祖父がたまたま優しきを見せたというわけではないのだ。説教するよりも他にせねばならないことがあり、それが怒りに優先したというだけの話だった。

今日を初日として、残り五夜。自分はその間、試練に堪えられるだろうか——いや、魂魄家の者として、堪えてみせねばならないのだ。そして、期待された以上のものを、主人にお見せせねばならない。西行寺家のためならば、どんなことであろうと成し遂げるのが魂魄家であると、祖父からずっと聞かされて育ってきたのだから。

西行寺のため。そう決意を新たにし、ひとまず妖夢は、全力で休息することとした。その身体の内では、先ほど祖父によつて与えられた官能の甘い疼きが、まだとろとろと淡くくすぶり、彼女をいつまでもくすぐっていた。